室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

アメリカ英語における方言的語法について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2014-06-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 武本, 昌三
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3320

アメリカ英語における方言的語法について

武 本 昌 三

Some Regional Variations of Morphology and Syntax in American English

Shozo Takemoto

Abstract

It is a matter of common knowledge that in American English several regional types of socially preferred speech are fairly well established. With typical American democracy Americans seem generally to consider each regional standard as good and acceptable as others.

Thus, even to some extent among the cultured, well educated speakers, regional variations of morphology and syntax can easily be traced. For example; *hadn't ought* for '*oughtn't*,' and the choice of the preposition *to* in such expressions as *he isn't to home, sick to the stomach* are all characteristic of the Northern area. *I'll wait on you, all the further, I want off, quarter till eleven* and *sick on the stomach* are to be found in the Midland, whereas *you-all, might could, I done told you that* and *use to didn't* are characteristic of the South.

はじめに

いわゆるアメリカ英語の語法と考えられるものの数はかなり多いが，この中から方言的に用いられるもののみを拾い上げて，それらを地域別に分類しようとすれば，その対象となり得ると考えられるものの数は急に少なくなってしまう。

イギリス英語との関連において考えなければならない一地方の歴史性，社会性，地理的条件等が，一つの方言的語法を二つ又はそれ以上の地方に分布せしめることは極めてありふれた現象であるし，更に，現代の高度に発達した交通とマスコミは劃然と一地域だけで用いられる方言の存在を益々困難なものにする。従って，一応最大公約数的にまとめるにしても，方言的語法と

して分類出来るものは，極めて限られたものになるのは当然である。

しかも，方言的語法としてまとめる場合，地域的分布の問題もさることながら，おのおのの語法がどのような階層の人々に用いられているかという使用階層の問題をも無視することは出来ない[1]。つまり speech community の中の教育レベルのみを考えても，高い人々，中位の人々，低い人々とさまざまに混在する中で，或る一つの語法が，どれだけのレベルの人々にどれだけ用いられているかということが，方言としての成立要因の重要な要素になって来るのである。

結局，地域的に劃然と分布範囲を限定出来ても，使用階層が一部に制約されていたり，或いは逆に，使用階層が社会構成員の全体に及んでいても，分布範囲が全国的な規模にひろがったりしているのであれば，どちらの場合も一般的な意味での方言としての対象にはなりにくくなってしまう。

従ってここでは，方言の地域性と同時に，その使用階層をも意識して行かねばならず，これを MacDavid の分類をもとにして，次のようにあらわしていくことにする[2]。

Type I. 古風で，あまり品のよくない教育程度の低い人々の言葉

Type II. 若くて現代的な，普通の教育を受けた人々の言葉

Type III. 洗練された，教育程度の高い人々の言葉

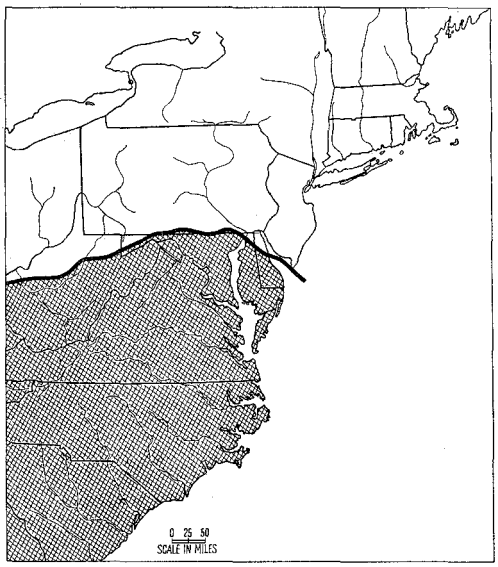
この中，少なくとも I, II の階層で用いられ，しかもその地域的分布範囲が比較的明確に限定されている語法だけがここで取上げられる対象である。分布範囲は大まかなものではあるが地図上に示すことにし，使用階層の程度は，I, II の場合 ▨ ，I, II, III の場合は ▩ のように示すことにしたい。又，文中 I, II, III に（ ）がついている場合は，そのグループの言語表現が，用いられることはあってもあまり一般化されていないという意味である。

方言的語法

代名詞

1. You-all (短縮形 y'all)

南部特有の教養ある人々によっても用いられている複数二人称形である。You の複数形であった thou が obsolete になったあとで，これに代る表現と



図—1

して，you men, you girls, you people, you folks, you guys 等が用いられているが，you-all もこの類型であろうとは考えられる[3]。ただし，この起原については未だに定説はなく，ただその発達が比較的新らしく，19 世紀の前半からであることは記録でたしかめられている[4]。

Children learn from the slaves some odd phrases; as, every which way; will *you all* do this? for, will *one of you* do this? —1824— [Mathews: DSA]

How are you-all this morning? Here's a pie when *you all* are ready for it. —[Wentwarth: ADD]

"You going to shack up here?"
"I thought I would if it's not inconvenient for *you all*. —Williams, *A Streetcar Named Desire*

You all come over tonight. —[Bryant: CAU]

Yawl (=you all) help me shell some corn. —Faulkner, *That Evening Sun*

南部ではこれに似た表現として，who-all や what-all もよく用いられるが，南部から中部へ入って行くと，you-all や we-all に対して you-uns，we-uns がよく用いられるようになる。DAE には 1869 年の次のような用例があるが，これもこのような地域差をあらわしているのかも知れない。

> During the war we all heard enough of 'we-uns' and 'you-uns,' but '*you-alls*' was to me something fresh. —[DAE]

You-all はこのように s をつけて you-alls となることは珍らしいことではないが，これが単数にも用いられるかどうかという点については，いろいろと論義されて来たようである[5]。Mencken は単数で用いられることがあるという説には否定的で，若し用いられることがあっても，それは無教育者の間においてだけである，と述べている[6]。

> As a matter of fact, the uneducated Southerner's feeling for the plurality of the expression is so strong that he sometimes says *you-alls*. —[Mathews : DSA]

ただし次の場合は無教育者の言葉ではあっても，単数の you と複数の yawl (=you-all) とは使い分けられている。

> You member (=remember) that night I stayed in *yawls*' room ? —[Falkner : ibid]

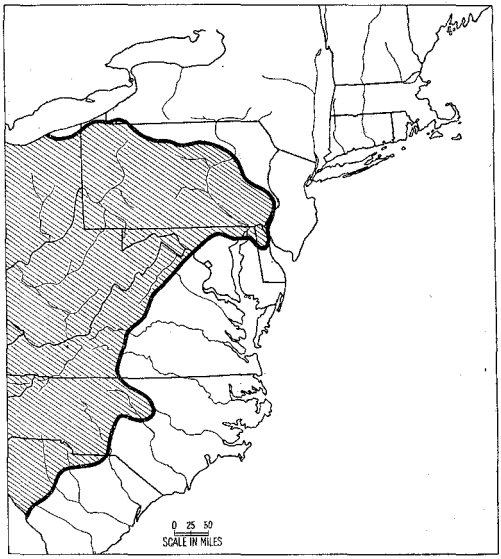
You-all は yóu-all とアクセントは常に前の部分にあって，you áll とは区別される。yóu-all は adjective＋pronoun と考えられるのに対して you áll と発音される場合には pronoun＋adjective であって，all of you と同じく，方言的ではない。

形　容　詞

2. all the farther (further) (=as far as)

主として中部地方の語法で，*all the farther*, *all the further* の両方ともひんぱんに用いられるが，どちらかといえば *all the further* の使用頻度の方が高く，この傾向は特に中部太西洋岸諸州で顕著である[7]。

使用階層は大体 Type I, と II に限られていて，Type III のグループによって用いられることはない。ただし，Kentucky においてのみは例外的にこ



図—2

れらの両方とも Type III によって用いられていると言われ，又 Upper Midwest の東半分では教養階層の少なくとも半分以上の者が *all the farther* を用いているという報告もある。この点，これらの語法の地域的分布状況は若干あいまいであるが，しかしいずれの場合でも，formal な written English では as far as が代って用いられているようであり，特に New England 地方では，spoken English においても as far as しか用いられない。

Two miles is *all the farther* (all the further) he can go. —[CAU]

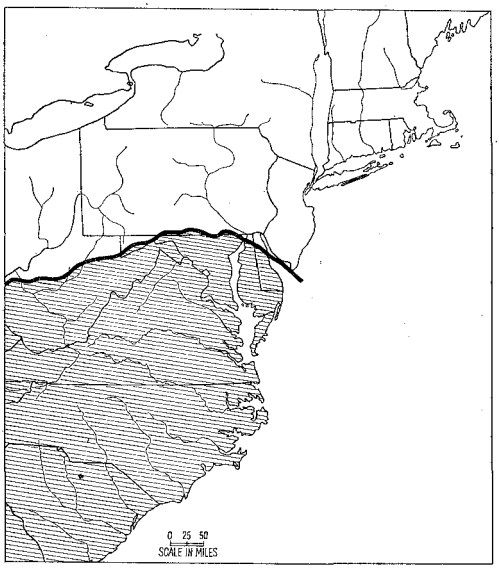
これに対して次のような語法は，一般アメリカ口語であり，用法も全国的にひろがっている。

Is that *all the later* (=as late as) it is? —[Curme]
Two miles is *the farthest* he can go. —[CAU]

動　　詞

3. (have) done＋過去分詞

主として南部で用いられる語法で，元来は迂言的 (periphrastic) な do



図—3

の過去分詞に次の動詞が牽引されて，同じく過去分詞形を持つに至ったものである。従って，このような done は一種の副詞ないしは助動詞的な働らきをしていると解してよいであろう。

I don't know what you need with another boy. You *done got* four. —Wallace, *Barington*

"*I've done quit,* Mr. Morris." Handsome said. —Caldwell, *Time H. B. Ran Away*

Mencken の AL Supplement II には，He *done bought* a new hat. He *done done* it. Bennie *has done* married などが招介されているが[8]，DAE にも 1827 年の *Done said* it. *Done did it.* のほか次のような 1917 年の用例が記録されている。

I *done told* you Burke. I—I was going to prove myself. —[DAE]

その他，文学作品からは，

Ah've (=I've) *done lost* track o' the time. —Dos passos, *Three*

Soldiers.

Your man *has done come.* —Caldwell, *Big Buck.*

You *done et* (=eaten). —Falkner. *That Evening Sun.*

このような表現はアイルランドから移って来たのだという説があるが確実ではない。DAE によれば，イギリスにおける用例はないようである。

4. hadn't ought

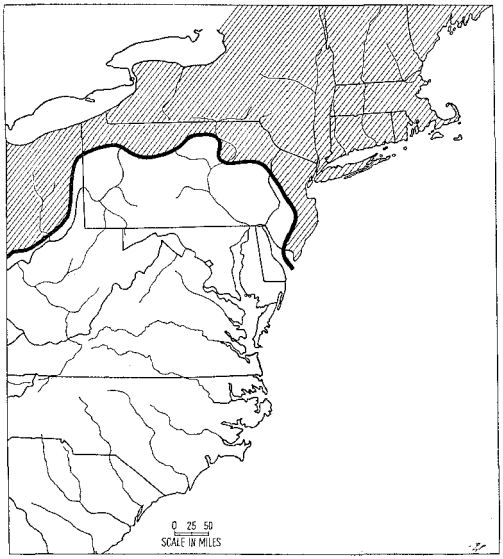
北部方言として *ought not to* の意味でひろく用いられている。イギリスでは元来文語であったものが，方言乃至は俗語として残り，アメリカ北部に伝えられたものと考えられる。OED には次のような 1470 年の用例がある。

Did you do that? You *hadn't ought.* —[OED]

文学作品の中の用例としては，

"We've all done a bunch of things that we *hadn't ought to.* —Lewis: *Babbitt.*

"I *hadn't ought* to talk"—Lewis: *Main Street*



図—4

"I don't think a fellow that can't get through an examination *had* hardly *ought to* be allowed to practice medicine"; and "He *hadn't ought* to be getting drunk." —Lewis: *Arrowsmith*

A man who would come knocking on a neighbor's door at mealtime *hadn't ought to* be listened to. —Caldwell: *The Midwinter Guest*

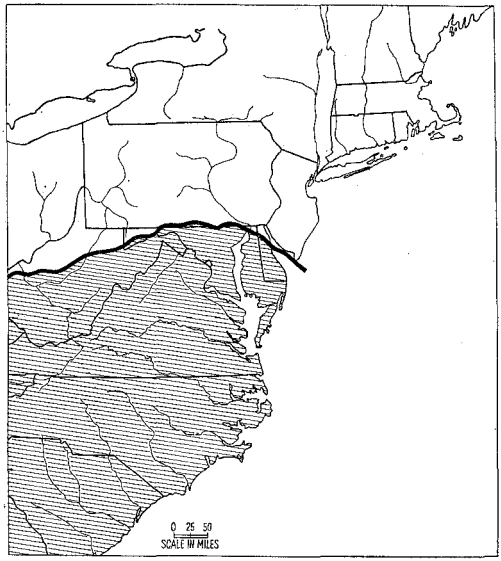
But Ah (=I) *hadn't ought* to have told you that… —Dos Passos, *Three Soldiers.*

肯定の had ought は hadn't ought とともに北部方言ではあるが，用いられることが少なく，無教育者の間のみに限定される[9]。

What *had* I *ought to* (=should I) give them? —Hemingway; *Macomber*

5. use to didn't

南部方言でひろく用いられている語法である。一般にアメリカ俗語では過去をあらわすのに used to を用いることが多いが，これが use to となり，否定の場合に use to didn't の形が生じたものと考えられる。didn't use to の



図—5

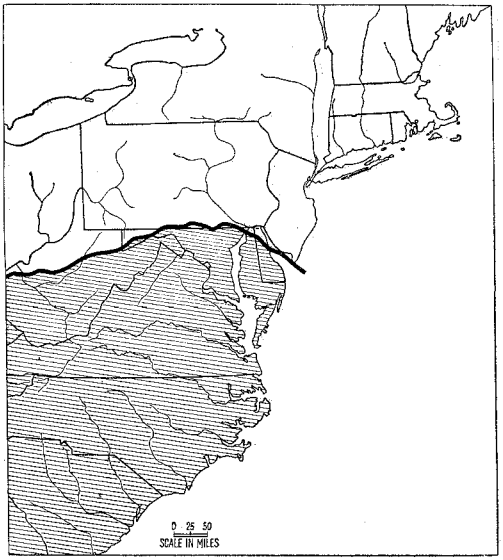
形では全国的であるから，use to didn't と区別されなければならない。なおイギリスの方言の場合には，否定形は usened to である[10]。

He *use to didn't* like it. —[ALII]
He *use to didn't* care how he looked. —[ALII]
It *didn't use to* be like that. —Jones; *From Here to Eternity*

この類型として，use to could, use to would, use to was, use to wasn't 等の用法が見られるが，これらは特に South 及び South Midland に多い。Fowler はこれらの用法を，"ungrammatical expressions, disapproved by all" と述べているが，Mencken はこれに対して，*use to could* は南部における colloquial speech として establish されたものであり，*use to didn't, use to wasn't* 等の用法も教養ある南部人に用いられることが珍らしくないと反論している[11]。

6. might could

この使用範囲は，殆んど South, South Midland 及び Pennsylvania の German area に限られる。Arkansas における調査では，*might could* は



図—6

may can とともに "almost universal" であるというが，written English の中では dialogue 以外には用いられていない[12]。

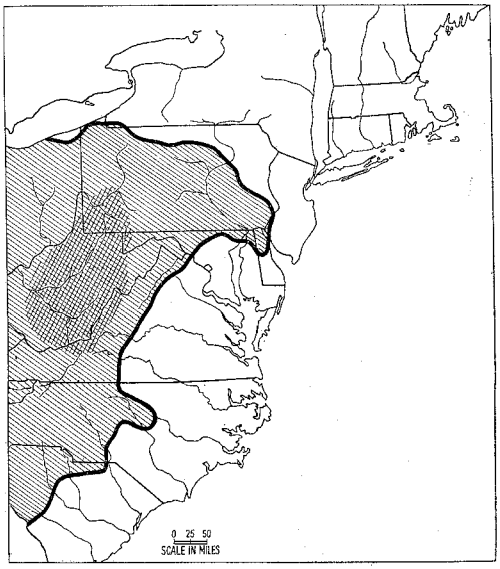
William Park の調査では，*might could* の類型の *might would*, *might can* なども，*use to could*, *ought to could* などとともに教養階級の間でも用いられることがあるという[13]。

7. want off

中部方言で Type I, II のほか教育程度の高い Type III の人々の間でも用いられることがある。ただし formal English では用いられない。

I *want off* (=to get off) at Juniper Street. —[CAU]

Upper Midwest における Malmstrom の調査でも，want to come in (go out) よりも want in (out) の方がはるかに多いが，Kurath はこれを *Ich will heraus.* というようなドイツ語から来たものであると述べている。一方，North Central States Records を手がかりにして，このような表現はイギリス語からスコットランド方言として残り，それがアメリカに伝わったもので



図—7

あるという説もある[14)]。

要するに，want が go, come の運動の動詞を用いずその意味をあらわす語法であるが，happen along (=happen to come along), let out (=let…come out) なども同類であろう。

Belgium *wants in* this protective arrangement. —[Curme]

The first thing is to not ever let them know you *want into* Number Two. —Jones, *From Here to Eternity*

Jim would *happen in* and say—Mark Twain, *Huckleberry Finn*

a hard piece of corn-crust took one of the children in the eye… and *let* a cry *out of* him the size of a war-whoop—Mark Twain; ibid.

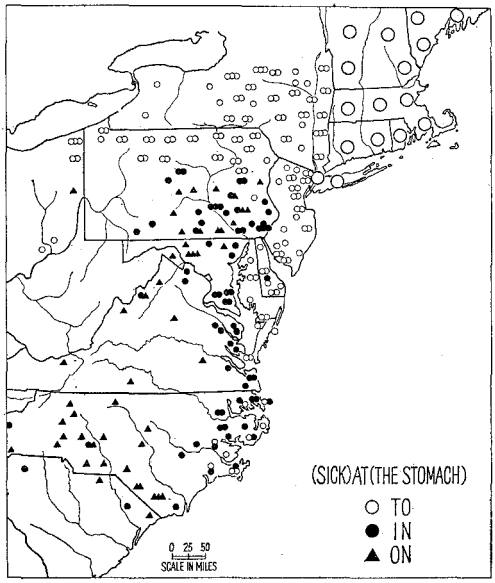
前　置　詞

8. sick to the stomach

9. sick on the stomach

10. sick in the stomach

sick to the stomach は北部方言で，*sick on the stomach* は中部，特に



図—8

Pennsylvania 東部で多く用いられ，*sick in the stomach* は Pennsylvania 南西部と中部の海岸地帯に散在する語法である。

sick to the stomach については DAE の用例で 1830 年にまでさかのぼることが出来，*in* or *at* についてはイギリスにおける 1653 年から 1831 年までのものがあるが現在では obsolete である。

> Rum, if they take tu much of it, makes folks *sick to the stomach.* —1830—[DAE]
>
> The Dog, when he is *sick at the stomach*, knows Cure, falls to his Grass, vomits, and is well. —1653—[OED]
>
> *Sick in my stomach* all the Morning—Owing to their hard Food. —1753—[OED]

一方 *sick on the stomach* については，ドイツ語の表現，*etwas auf dem Magen haben* や，或いはイギリス英語自体の *to have something on the stomach* から影響されたものであろうという[16]。

なお中部地方では，この *sick on the stomach* のほかに，*sick at*, *sick from*, *sick with*, *sick in* 等がさまざまに用いられることもあるようである。

11. (he isn't) to home (=at home)

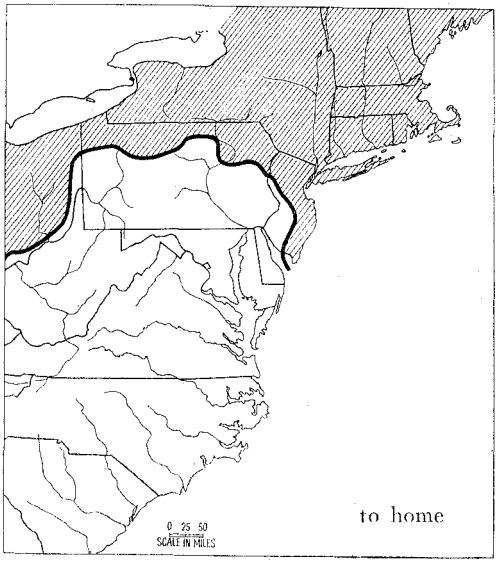
この用法は現在でも北部方言として，特に，New England の田園地帯，New York 州の中心部，それに Susquehanna 上部などでひろく用いられているが，北部内陸地方ではすたれつつあるようである。又一般に，教育程度の高い人々の間で用いられることはない。

大体北部地方では，例えば *sick to the stomach* のように，前置詞 *at* の代りに *to* を用いる傾向があるので，この場合も，*at home* が *to home* として用いられていると考えてよいであろう。

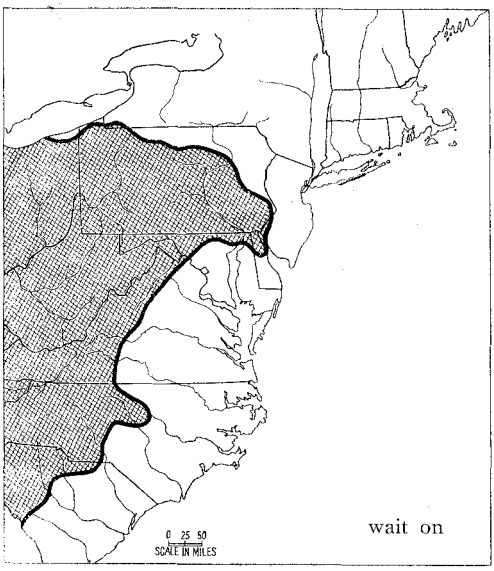
> We'd been up *to* (=at) Russian Peter's, to borrow a spade for Ambrosch. —Cather, *My Antonia*

12. wait on (=wait for)

"I'll *wait for* you" の意味で "*wait on*" を用いるのは Midland の方言で，教育程度の高い人々の間にも用いられることが珍らしくない。South Carolina や North Central 諸州においても用いられてはいるが，これらの地方で



図—9



図—10

は，除々にすたれつつあるようである。

又，一般的なアメリカ語の colloquial としては，*wait around* が DAE に 1895 年からのものが記録されており，*wait about* もひろく全国的に用いられている傾向がある。

I suppose they're *waiting around* till it stops raining. —1899—[DAE]

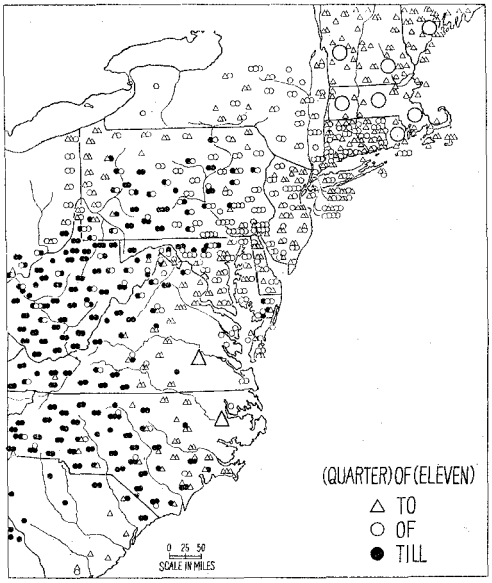
ただ，formal な written English では，Midland でも *wait for* を用いる[17]。

13. quarter till eleven (=**to**)

中部地方特有の表現で，教育程度の高い人々の間にもひらく用いられている。Bryant によれば，特に South Central Pennsylvania とその南部地方に多く用いられているという[18]。

Ten minutes till ten—[CAU]

北部地方では一般に *quarter of eleven*, *quarter to eleven* が同じ程度に用いられているが（但し Boston 附辺では例外的に *quarter of* の方が多い），こ



図—11

れに対して南部では *quarter to* が殆んどである。又，Philadelphia では *till* よりも *of*, Pittsburgh では *of*, *to* がより多く用いられている傾向が強い[20]。

む す び

以上，方言的色彩の強い語法の代表的なもののいくつかを拾い上げてみた。此の種の分類には，例外と異説はつきまとうであろうが，ごく大ざっぱに，これらを北部，中部，南部に分けると，大体次のようになるであろう。

北部　*sick to the stomach* I, II (III)
he isn't to home I, II (但し，内陸部では用いられなくなりつつある)
hadn't ought I, II
その他　*it wan't me* I, II (南部も同様)
he lives in (=*on*) *King Street* I, II (III)
we stood on (=*in*) *line* I, II, III

中部　*all the further* I, II
I'll wait on you I, II, III (South Carolina も同様。但し North Central 諸州では用いられなくなりつつある)
I want off I, II (III)
quarter till eleven I, II, III
sick on the stomach I, II
その他　Germanisms : (*the oranges are*) *all* (=*all gone*) I, II
got awake (=*woke up*) I, II

南部　*you-all* I, II, III
might could I, II
I ('*ve*) *done told you* I, II
use to didn't I, II
その他　*it wan't me* I, II (北部と同様)
a apple I, II (ひろがりつつある傾向)
I ran up on him I, II

注

1) この点については，拙稿"アメリカ英語における方言の研究"室蘭工大研究報告，第5巻第2号を参照されたい。

2) Francis, W. Nelson. *The structure of American English*, New York: The Ronald Press Company, 1958, chapt. 9 参照。
3) Bryant, Margaret M., *Current American Usage*, New York: Funk & Wagnalls Company, Inc., 1962, pp. 237-238 参照。
4) Mencken, H. L., The American Language: Supplement II, New York: Alfred A. Knopf, 1948, pp. 375-378 参照。
5) この点については, Horwill, H. W., *Modern American Usage*, Oxford University Press, 1958, p. 355 に興味あるくわしい解説がなされている。
6) Mencken. H. L., ibid. pp. 375-378.
7) Bryant, ibid, p. 19.
8) Mencken, ibid. p. 365.
9) Bryant, ibid, p. 157.
10) 大塚高信 新英文法辞典. 三省堂, 1959, p. 961.
11) Mencken, ibid. pp. 364-365.
12) Mencken, ibid, p. 133.
13) Mencken, ibid, p. 364.
14) Bryant, ibid, p. 224.
15) Kurath, H., *A Word Geography of the Eastern United States*, Univ. of Michigan Press, 1949, Fig. 152.
16) Kurath, ibid, p. 78.
17) Bryant, ibid, pp. 223-224.
18) Bryant, ibid, pp. 219-220.
19) Kurath, ibid, Fig. 44.
20) Kerr & Aderman, *Aspects of American English*, New York, Harcourt, Brace & Wored, Inc. p. 127 及び Kurath, ibid, p. 30 参照。

参 考 文 献

Mathews, M. M., *A Dictionary of Selected Americanisms on Historical Principles*, Univ. of Chicago Press, 1951.

Murray et al, *The Oxford English Dictionary*, Oxford, University Press, 1933.

Craigie et al, *A Dictionary of American English*, Chicago, University of Chicago Press, 1965.

Evans & Evans, *A Dictionary of Contemporary American Usage*, New York, Random House, 1957.

Guralnic et al, *Webster's New World Dictionary of the American Language*, New York, The World Publishing Company, 1951.

Mencken, H. L., *The American Language*, 4th ed. New York, Alfred A. Knopf, 1957.

Mencken, H. L., *The American Language*, Supplement I, 1956.

Mencken, H. L., *The American Language*, Supplement II, 1956.
Mencken, H. L., *The American Language*, One-Volume Abridged Edition, 1963.
Krapp, G. P., *The English Language in America*, New York, Century, 1952.
Bryant, M. M., *Current American Usage*, New York, Funk & Wagnalls Co., 1962.
Horwill, H. W., *A Dictionary of Modern American Usage*, Oxford, University Press, 1944.
Whitford & Dixson, *Handbook of American Idioms and Idiomatic Usage*, New York, Regents Publishing Co., 1953.
Whitford & Foster, *Concise Dictionary of American Grammar and Usage*, New York, Philosophical Library, Inc., 1955.
Hook & Mathews, *Modern American Grammar and Usage*, New York, Ronald Press Co., 1956.
Fowler, H. W., *A Dictionary of Modern English Usage*, Oxford, University Press, 1957.
Fries, C. C., *American English Grammar*, New York, Appleton-Century-Crofts, Inc., 1940.
Curme, G. O., *Syntax*, Boston, Heath & Co., 1931
Nicholson, M., *A Dictionary of American English Usage*, New York, The New American Library of World Literature, Inc., 1958.
McDavid, R. I., "American English Dialects", *The Structure of American English*, New York, Ronald Press Co., 1956.
Pyles, T., *Words and Ways of American English*, New York, Random House, Inc., 1952.
Marckwardt, A. H., *American English*, New York, Oxford University Press, 1958.
Kerr & Aderman, *Aspects of American English*, New York, Harcourt, Brace & World, Inc., 1963.
尾上政次　現代米語文法．研究社 1957.
尾上政次　アメリカ語法の研究．研究社 1963.
豊田　実　アメリカ英語とその文体．研究社 1965.